

巻頭言：「アフリカ虹色の革命」への出発点

著者	高瀬 国雄
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2007-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008138

「アフリカ虹色の革命」への出発点

高瀬国雄（国際開発センター顧問，農学博士）

1945年8月6日，広島県江田島の海軍兵学校にいた19歳の少年が，北方のキノコ雲が原爆であることを知り，京大農学部を経て，81歳の今日までの62年間，農村開発に捧げた記録をここに要約しておきたい。

1949年から3年間，戦後食料増産の第一線であった岩手県山王海ダム現場の体験を，当時日本全国で建設中の百を超えるダムの設計基準として，農林本省でまとめた。1956年には，途上国であった日本が，世界銀行から愛知用水事業融資を受け，私は57年から16カ月間，研修生としてシカゴに単身赴任した。

1964年の東京オリンピック，東海道新幹線開通，そして池田内閣による所得倍増計画も順調に進んだ。わずか20年間弱でコメ自給を達成した日本は，ベトナム戦争後のアジア開発を模索するアメリカと協力して，1966年マニラにアジア開発銀行（ADB）を設立した。そこでの私の初仕事は，「緑の革命」をアジアで達成させるための農業調査団の一員として，世界の農林牧水産の技術・経済専門家20名とともに6カ月間，アジア15カ国を巡回することであった。この調査に基づいて，ADBは農村開発に35%以上の融資を投入し，アジア諸国のコメ生産倍増を20年間でほぼ実現させた。これが1993年に世銀が賞賛した「東アジアの奇跡」や，2007年「東アジアのルネサンス」の原動力ともなった。

1986年に60歳でADBを定年退職し帰国した私は，それからの20年間，国際開発センター（IDCJ）理事として，全世界71カ国（アジア24，アフリカ17，中南米13，欧米17）を巡回した。2000年9月の国連ミレニアム・サミットで，189カ国の代表が，2015年までに国際社会の達成すべき8つの目標（MDGs）に合意した。これは，貧困や食料への対応のほか，教育，保健，環境を含む「広義の農村開発」と，直接投資，貿易を含む「民間協力」を必要とする。

アフリカ経済は，1960年代の独立時にはアジアより高水準だったのに，東西冷戦の終了時には世界最低水準に陥った。その主因として，政治的独裁，計画経済，部族対立，自然条件のほか，ドナーの協力方針も問題点とされている。しかしながら，アフリカ農業に関わる問題点が十分理解されていない。トウモロコシ，キャッサバ，豆，コメ，果樹，野菜，畜産物など，アフリカには主要な食料が少なくとも7種類あり，「虹色の革命」に向けた幅広い挑戦が必要なのである。

2008年5月に横浜でTICAD IV（アフリカ開発会議）が，7月には洞爺湖G8サミットが開催される。1967年にADBが「緑の革命，農業調査」をスタートさせたように，アフリカ経済開発の起爆剤としての「虹色の革命，農村調査」を，新JICA体制で出発させることが，日本として，アフリカへの最大の貢献となる。